巨勢（こせ）の道コース

●約10キロ
「葛駅～安楽寺～巨勢寺跡～阿吽寺～八幡神社～水泥古墳～大穴持神社～葛木御歳神社～船宿寺～船路バス停」

コースのあらまし

葛駅を起点に吉野口駅まで近鉄線に沿って歩くコースは葛駅から安楽寺、御霊神社、安楽寺塔婆。途中、田園の中の巨勢寺跡に立ち寄る。続いて、椿の名所・阿吽寺を経て、曽我川と田畑に囲まれた県道を歩く。天気が良ければ、この辺りから左方向に大峰山脈が望めることも。分岐から少し入ると水泥古墳があり、水泥双墓とも呼ばれ玄室と石棺が見られる。
八紘寺、正覚寺を過ぎ栗阪峠へ。ここでのポイントは登りより下り。峠を下るとき、視界がパッと開け金剛・葛城山の雄大さに疲れもどこかに。あぜ道を通って御歳神社、そして花の寺・船宿寺へ。帰路は船宿寺近くの船路バス停があるが、万葉集に詠まれた巨勢道を通って風の森バス停まで歩いてみたい。

ハイキングのエチケット

☆ゴミはまとめて持ち帰りましょう。
☆山火事防止のためタバコに注意しましょう。
☆文化財の付近では、タバコ・たき火は禁止されています。
☆大切な自然です。植物の採集はつつしみましょう。

●阿倍野橋駅から葛駅まで約55分
●京都駅から葛駅まで約1時間5分
（橿原神宮駅まで特急利用）
●名古屋駅から葛駅まで約2時間20分
（橿原神宮駅まで特急利用）
●バス　船路から近鉄御所駅まで約15分
風の森から近鉄御所駅まで約20分

●交通機関のお問合せ
奈良交通　☎0745（63）2501
近　　鉄　☎0745（62）2420

御所市観光協会　☎0745(62)3346

３月例会資料①

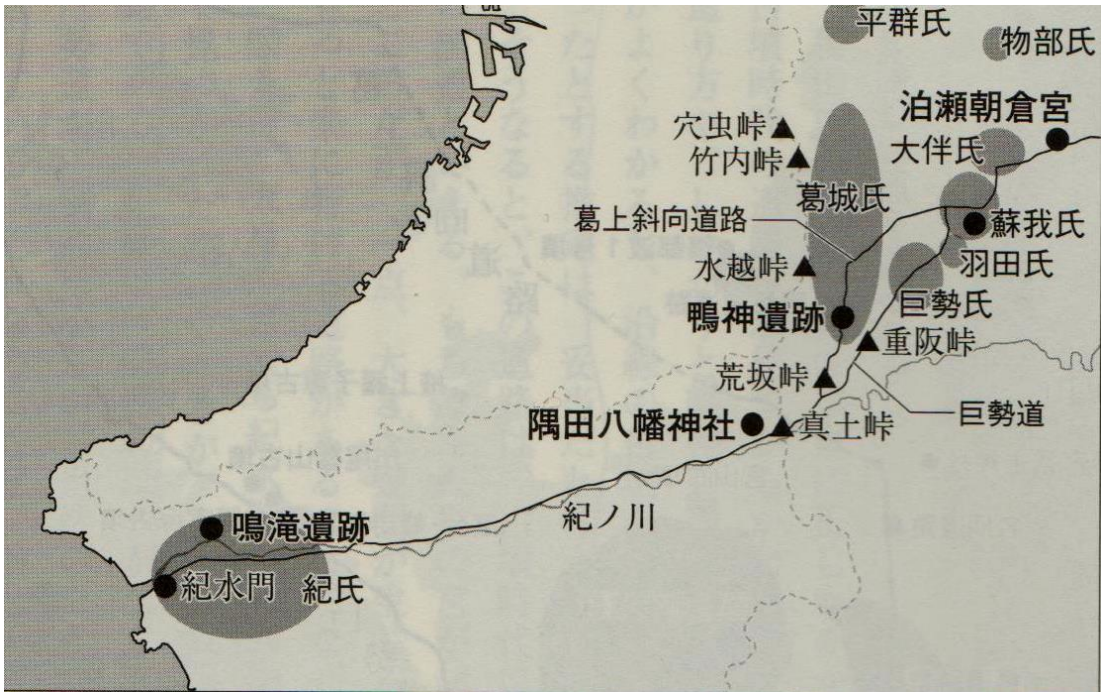
１、紀路・葛城道・巨勢道を制した古代豪族

大和時代、５世紀後半から６世紀代に、歴代の王宮は磐余（いわれ）とか初瀬（はつせ）といった地域にありました。紀路（きのみち）はこの時期に王宮の所在地と紀ノ川河口とを結ぶ道で,4～５世紀には、このルートは葛城古道を経由し、有力豪族の葛城氏の支配下にありました。葛城氏は紀氏と協力して、朝鮮半島など海外との進出に活躍し、海外の文物や技術者を受け入れながら実力を蓄え、大王家に拮抗するする勢力となります。

5 世紀の半ば、大王家の外戚となって権勢を誇った葛城宗家円大臣が、雄略天皇と対立して滅ぼされると、紀路はヤマト政権が直接支配することになります。また、ルートも葛城山腹を経由せずに、距離的に短く高低差の少ない巨勢街道を経由し五条に至る路に変わります。７世紀飛鳥時代になっても、紀路は飛鳥と紀ノ川河口を結ぶ重要な道で、奈良時代には南海道となります。

古代の**紀水門（きのみなと）**は、５・６世紀においては、大和王権が直接管理する海外窓口の港としてきわめて重要な機能を果たしていました。紀ノ川は、落差が少なくて、途中に滝がなく、古代にはもっと水量があり、紀ノ川河口から奈良県下市町千石橋までは（千石船が？）船で遡ることが出来ました。紀ノ川河口に近い和歌山市善明寺では、５世紀中頃の鳴滝倉庫群が検出されており大和朝廷の管理する大倉庫群がありました。
７世紀になると、飛鳥朝廷の外港は難波津に限定されていきます。

泊瀬朝倉宮（雄略天皇）から紀水門のルート



図は近江俊秀氏「道が語る古代日本史」より

２、巨勢道と巨勢氏

巨勢氏は、大和国高市郡巨勢郷（現在の奈良県御所市古瀬）を本拠とした古代豪族で、その本拠地は，曾我川の上流に近い山間で紀伊に至る紀路が走る要衝にありました。

記紀によれば、巨勢氏は孝元天皇の子孫で、武内宿禰の五男である「許勢小柄宿禰」を始祖として、6 世紀以降、朝鮮半島との外交・軍事に従事することによって台頭した新興豪族です。

継体天皇の時代、その擁立に功績があった巨勢男人は大臣に任じられ、内政外交に力を振い、大いに勢力を伸ばしました。

奈良県高市郡高市町にある６世紀初頭の前方後円墳「市尾墓山古墳」全長６６ｍの主は、「巨勢男人」と言われ、隣接する「市尾宮塚古墳」もその後継者にものといわれている。
また　巨勢山古墳群には、700 基を上回る日本最大級の古墳群が確認されています。

（巨勢氏の著名人）

巨勢男人

継体天皇（507 年～）の大臣。娘の紗手媛(さてひめ)・香々有媛(かかりひめ)を安閑天皇に嫁がせている。

巨勢比良夫

用明 2 年（587 年）　蘇我・物部の争い（丁未の乱）に蘇我方で参加した。

巨勢徳陀（徳陀古）

乙巳の変（６４５年）で中大兄に味方し、大化 5 年（649 年）孝徳天皇の左大臣。

巨勢人

近江朝で御史大夫。壬申の乱で近江方として戦って敗れ、流刑に処される。

巨勢黒麻呂

天武 13 年（684 年）朝臣姓を賜る。

巨勢奈弖麻呂

天平勝宝元年（749 年）従二位大納言に叙任される。

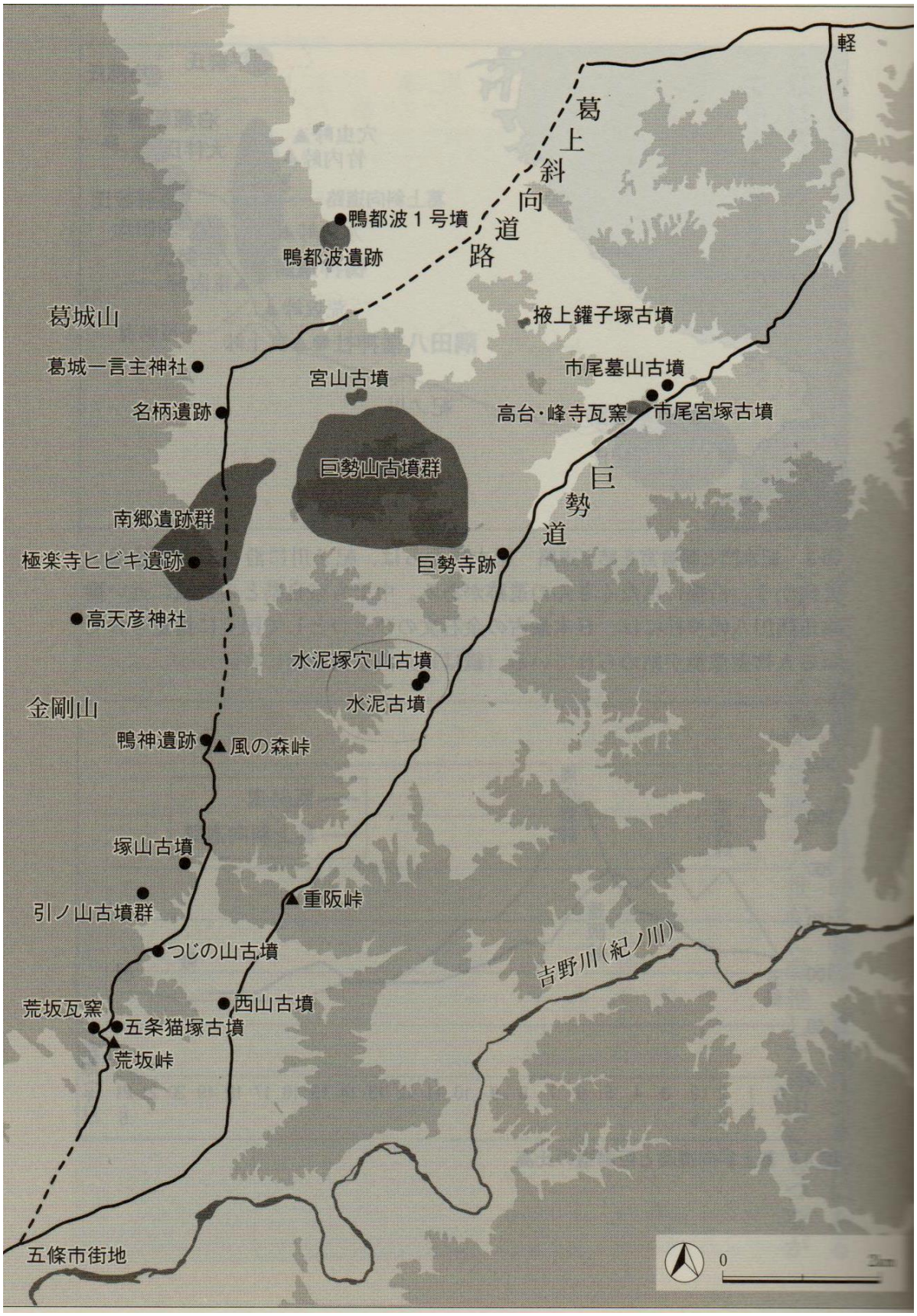
巨勢野足

弘仁元年（810 年）野足が蔵人頭に補任される

巨勢金岡

野足の孫。平安前期（９世紀後半）の絵師。大和絵巨勢派の祖。

葛城道と巨勢道



図は近江俊秀氏「道が語る古代日本史」より引用

３、水泥古墳（水泥北古墳、水泥南古墳）について

西尾邸にある国指定史跡「水泥古墳」には、蝦夷・入鹿の双墓との伝承があります。

日本書紀皇極元年紀に蘇我氏の暴虐振りを示す記述として

「又尽に国挙る民、併せて百八十部曲を発して、予め双墓を今来に造る。一つをば大陵と曰ふ。大臣の墓とす。一つをば小陵と曰ふ。入鹿の墓とす。」

があります。

この双墓については、江戸時代の享保 17 年（1734 年）に書かれた**大和志**に記述があります。

「葛上郡今木双墓在古瀬水泥邑、与吉野郡今木村隣」

の記述から、双墓は御所市古瀬水泥と大淀町今木の境にあるとし（「日本書紀」岩波文庫　校注）、水泥古墳が日本書紀にいう蝦夷、入鹿の双墓であると伝えられていた。

しかし、これらの古墳の年代は、いずれも 6 世紀中～後葉のものと判断されている（別紙に、奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編「飛鳥時代の古墳」よりの抜粋）ことから、蘇我蝦夷・入鹿の墓ではなく、巨勢一族の首長の墓と考えるのが妥当と思われます。

（古川祐司）

３月例会資料②

巨勢路のつらつら椿の歌

「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つつしのはな巨勢の春野を」坂門人足
（万葉集巻１－５４）

大宝元年、７０１年９月、持統太上天皇は文武天皇と共に２度目の紀の湯(白浜湯崎温泉)行幸を行う。それを供奉した坂門人足の作である。
詠んだのは秋９月だから椿は咲いていない。椿の並木であろうか。今は秋だが、巨勢の春野はどんなにいいだろう、想像して偲んだ歌である。巨勢の春野は、かつて吉野行幸の時に目にしたことのある風景であったのだろう。その巨勢の春野に、思いをはせることは、一同が共通に知っている、持統天皇を中心とする吉野行幸の華やぎや、その折の、高揚する心を、思い起こすことでもあった。

大宝元年のこの時期は、大宝律令が完成して律令国家が軌道に乗り、藤原京を造営し曾孫の首皇子の誕生もあって、満ち足りた旅だった（持統太上天皇はこの翌年に薨去する）。万葉集巻１の編者は、新しい時代の幕開けを告げるのに最もふさわしい歌としてこの歌を選び、大宝元年の紀伊国行幸時の歌群の、最初に置いたのであろう。

また万葉集には、これの一つ後に、「或本の歌」として
「河上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は」（万葉集巻１－５６）

を採りあげている。春日老の歌で、坂門人足より前に詠まれた歌である。「つらつら椿つらつらに」の春日老の歌の音調の良さは宮廷間に言い伝えられ、巨勢は歌枕として、この坂門人足の歌を作る原動力になっていたと想像されている。

［春日老（かすがのおゆ）、春日倉首老（かすがのくらおびとおゆ）］奈良時代の官僚・歌人。従五位下，常陸介。万葉集に八首収められている。もとは僧弁基という者で大化元年３月還俗、和銅７年正月、従五位を授けられた。

（参考）
大和から紀伊へ行く紀路は、藤原京、或は飛鳥から現在の近鉄吉野線に沿い、御所市古瀬から、曽我川の渓谷を遡行し重坂峠を越え、五条市 に出る。ここからは紀ノ川沿いに五条市上野(こうづけ)から待乳山の南を越えて紀和国境の落合川、神代の渡り場を渡る。かつらぎ町の「背の山」「妹山」を通って太平洋岸の和歌の浦に出るものであった。

巨勢は、大和から紀伊への通路にある土地であるが、ここから東南に、今木峠を越えると、吉野へ出る。万葉時代には、飛鳥･藤原京方面から、吉野川流域に出るには、5ルートがあり、その中でも、巨勢から今木峠を越え、下市口に出るルートは、距離は最も長いものの、一番負担の少ないものであった。　（犬養孝氏『万葉の旅』による）

（古川　祐司）

3月例会資料③

葛木御歳神社（かつらぎみとしじんじゃ）

（御歳神社の HP より抜粋）

ご祭神

御祭神　御歳神（みとしのかみ）

相殿　大年神（おおとしのかみ）高照姫命（たかてるひめのみこと）

由緒

御祭神はご本社の背後の美しい御歳山に お鎮まりになって、金剛山の扇状地にひらけた稲田を御守護された神であります。古くは神奈備（かむなび-神の鎮座する山や森）の御歳山に自然石の磐座をたて、神を迎えてお祀りするという古式の形式だったと思われます。 現在の本殿は、春日大社の本殿第一殿を移築したものであります。

御歳神

御神名の「トシ」は穀物特に稲、またはその稔りをさす古語で、稲の神、五穀豊穣をもたらす神として古くから尊崇されています。また稲は年に一度稔ことから始めは稲の稔ことを意味した「トシ」が、一年の単位を示す言葉へと転じていったとされています。.

古来より朝廷で 豊作祈願のために行われた年頭の祈年祭(としごひのまつり)には、まず本社の御歳神の名が読みあげられました。 古書の記録では、仁寿二年（八五二年）には、大和国で本社だけが最高の正二位の神位を授かる程篤く尊崇され、後に従一位に昇格され、延喜の制では、名神大社に列した神社として尊ばれた古社であります。

本社は、鴨氏の名社で、御所市にある高鴨神社(上鴨-かみがも社)、鴨都波神社(下鴨-しもがも社)とともに中鴨社（なかがもしゃ）として親しまれています。

・・・・中略・・・・

御祭神について

・大年神（おおとしのかみ）、御歳神（みとしのかみ）

古事記には須佐之男命（スサノヲノミコト）と妻の神大市比売命の御子が**大年神**で、大年神と香用比売命の御子が**御歳神**であると記されています。

・高照姫命（たかてるひめのみこと）

高照姫命は大国主神の娘神で八重事代主神の妹神であります。一説には高照姫命は下照姫命（拠-古事記に高比売命＝高照姫、別名下照姫命とある）、加夜奈留美命（拠-五郡神社記）、阿加流姫命と同一神とも云われています。

「お年玉」の起源・・・茂木貞純著「日本語と神道」より

お正月に迎える神は歳神という。常盤木の松の命に象徴される神である。正月は歳神様を迎え、家族そろって祝う神祭りである。この神へのお供え物には丸い鏡餅を重ねて供える。東北では正月に作る小さな丸い餅のことを「年玉」といい、子供などに与える風習がある。元来「年玉」とは歳神に供える餅であり、そのおさがりを雑煮としていただくことにより、神の恩頼（みたまのふゆ）を得て、無事に一年を過ごすという信仰である。だから、歳神様の代理である一族の長老や年長者からお年玉を頂く習慣ができたのである。

御歳神について『古語拾遺』には・・・

神代の昔、大地主神が田を作る日に、農夫に牛の肉をご馳走した。その事に怒った御歳神は田にいなごを放ち苗の葉を喰い枯らしてしまった。そこで大地主神は、白猪・白馬・白鶏を献上して謝したところ、そのお怒りが解けた。・・・以下省略・・・

古代における朝廷でも、祈年祭には、この御歳神社にだけ、白猪・白馬・白鶏を、献じられたのも、上のような意味合いにおいてであります。

〔境内摂社〕

味鋤高彦根命神社、高皇産霊命神社、神皇産霊命神社、天照皇大神神社

事代主命神社、天稚彦命神社、稚日女命神社、一言主命神社

（古川　祐司）

①.畿内型家形石棺

畿内の家形石棺では、蓋上部の平坦部が狭く、蓋の長側斜面にそれぞれ二個、合計四個の縄掛突起を持ち、蓋と身の部分を印篭合わせにした刳抜式のものが、中期の終末期に現れます。その後、丸味をもっていた縄掛突起が角張った方形断面に変わり、蓋の短辺にも各一個の突起が加わり合計六個の突起を持つようになります。続いて突起の位置も蓋斜面から側面に下がり、やがて縄掛突起のないものが現れます。一方後期中頃、6 世紀中葉には、組合式の家形石棺が出現します。この組合式家形石棺も様々な類例がみられますが、基本的には、長辺側石の外側に短辺側石を組み合わせる構造で、中期の長持形石棺とは構造上異なっています。組合式家形石棺では、一般に蓋の形状が刳抜式のものに比べ、薄く平板になるのが多いようです。また石棺を構成する板材の数も、六枚から十枚と変化に富み、縄掛突起の数も各長辺に四個とか、各短辺に二個とか多い例が知られています。こうした畿内型の家形石棺は九州を除いた各地でも製作され、例えば岡山県地方や、東国、愛知県の木曽川流域、静岡県東部、群馬県東部などでみられます。

②.九州型家形石棺(槨)

先の畿内型家形石棺とは全く形態や性格を異にする家形石棺が九州地方に分布しています。九州では熊本県を中心に約 70 例もの家形石棺が知られていますが、その多くは底石を持たないものです。これは弥生時代以来の箱式石棺が、屋根形棺蓋を持つ舟形石棺の影響を受けて出現したもので、本来は棺というより槨(室)としての機能をもつものとみられています。これらの内、横穴系墓室の影響を受けた横口式のものがいくつか知られ、石棺式石室とよばれています。

③.出雲系家形石棺

島根県の出雲を中心とする山陰地方にも、特徴ある家形石棺が数多くみられます。特にこの地域では、横穴式石室に限らず、横穴内に用いられたものも少なくありません。この出雲系の家形石棺には、長側辺側(平入り)に横口をもつものが多くみられ、横口付家形石棺とよばれています。また石棺式石室もおおくみられ、おそらく九州の横口付の石棺式石室の影響により出現したものと考えられていますが、九州地方のものは、短側辺側(妻入り)に横口の付いた石棺が多くみられます。年代は後期から終末期にかけてのものですが、ただ同じ山陰地方でも鳥取県などでは畿内型の家形石棺が多いようです。

3月例会資料別紙

国指定史跡　水泥（みどろ）古墳

水泥古墳は、約100mの間隔を隔てて存在する水泥北古墳と水泥南古墳を併せて、２基一括で昭和36年に国史跡に指定されている。

《水泥北古墳》

西尾氏邸内にある、直径約20mの円墳で両袖式の横穴式石室を有する。石室は全長13.4m、玄室の長さ5.6m、同幅約2.9m、同高さ約3.3mの大規模な石室で、花崗岩の大きな石を用いて構築している。６世紀中頃の築造である。現在すでに棺はないが、小規模なトレンチ調査で石棺材となる凝灰岩の破片が出土したので、元は石棺が安置されていたと推測できる。また、副葬品などは知られないが、追葬時に瓦質円筒状の排水管を使用していた。

《水泥南古墳》

南古墳は６世紀後葉に築造された、直径約25mの円墳とみられる。北古墳に比べると規模は小さいが、横穴式石室が南方向に開口している。石室の全長は約15m、玄室の長さ4.6m、幅2.4m、高さ2.6mである。玄室の床面には拳大の礫が敷かれていた。

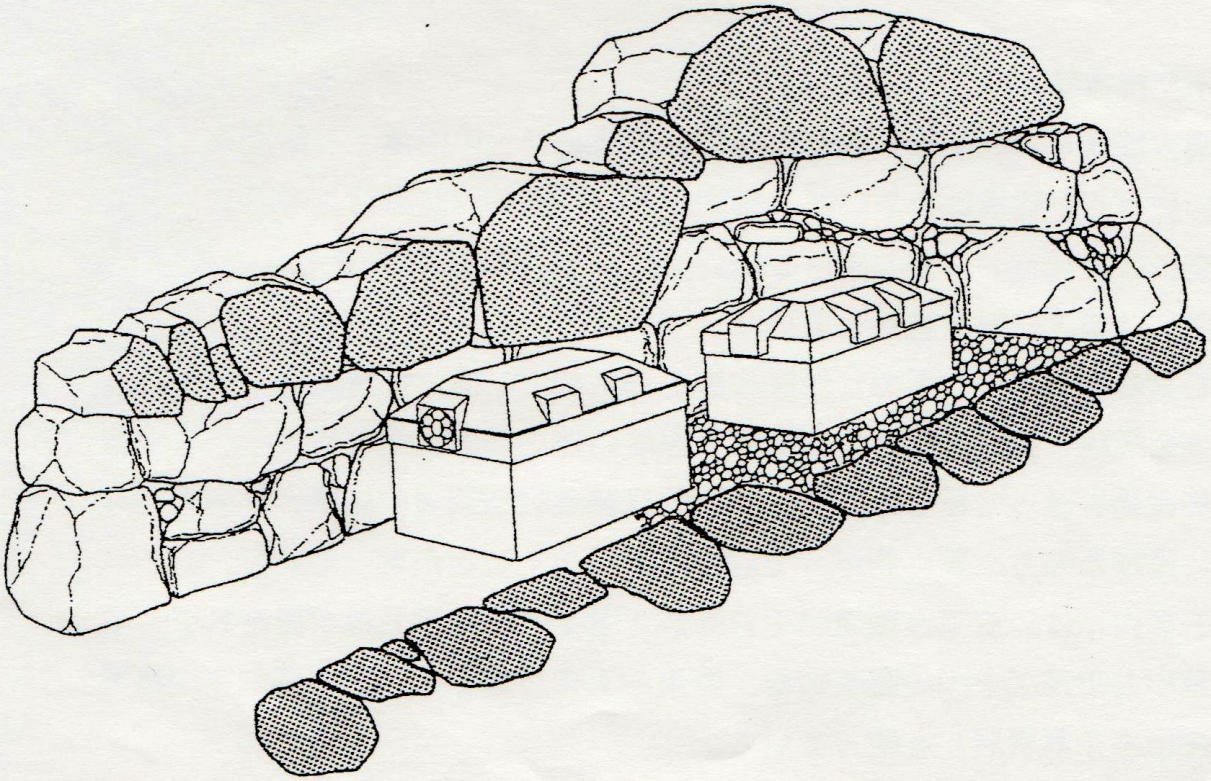
石室のこの礫床の下部には排水溝が造られていた。排水溝は石室のほぼ中央を溝状に掘り、溝の中には拳大程度の礫を詰めるものである。この溝は羨道部を通って石室外に出るが、前庭部の発掘調査の結果、さらに南方向に伸びたのち、東に曲がって谷の方向に続くことが判っている。

石室内には、玄室と羨道にそれぞれ１基ずつの家形石棺が置かれている。玄室のものは二上山の凝灰岩を、羨道のものは竜山石（兵庫県加古川流域で産出する凝灰岩）を使っている。

特に注目されるのは、羨道にある石棺蓋の縄掛け突起である。小口部の縄掛け突起には蓮華文（ハスの花をかたどった模様）があり、古墳文化と仏教文化の結合の一例として著名である。また、側面の縄掛け突起は削ら

れて小さくされた痕跡が残っている。これは、追葬時に石棺を石室内に搬入するに際して、羨道側壁に縄掛け突起が当たったため、削ってしまったものであろう。

平成７年度の発掘調査で、高杯・瑕・台付瑕・台付長頸壺などの土器（須恵器）や、羨道にある石棺内から金銅製の耳飾り（耳環）が出土した。



水泥南古墳の横穴式石室

奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編『飛鳥時代の古墳』より（一部改変）